

其の国より科野国に越えて、乃ち科野之坂神を言向けて、尾張国に還り来て、先の日
に期れる美夜受比売の許に入り坐しき。是に大御食を献りし時に、其の美夜受比売、大御
酒盞を捧げて献りき。爾くして、美夜受比売、其のおすひの欄に、月経を著けたり。故、
其の月経を見て、御歌に曰はく、

ひさかたの 天の香具山 鋭喧に さ渡る鵠 弱細 撓や腕を 枕かむとは 吾はす
れど さ寝むとは 吾は思へど 汝が着せる 襲衣の欄に 月立ちにけり

爾くして、美夜受比売、御歌に答へて曰はく、

高光る 日の御子 やすみしし 我が大君 あらたまの 年が来経れば あらたまの
月は来経行く うべな うべな うべな 君待ち難に 我が着せる 襲衣の欄に月立

たなむよ

故爾くして、御合して、其の御刀の草那芸剣を以て、其の美夜受比売の許に置きて、

伊服岐能山の神を取りに幸行しき。

是に、詔はく、「茲の山の神は、徒手に直に取らむ」とのりたまひて、其の山に騰りし
時に、白き猪、山の辺に逢ひき。其の大きさ、牛の如し。爾くして、言挙為て詔はく、「

是の白き猪と化れるは、其の神の使者ぞ。今殺さずとも、還らむ時に殺さむ」とのりたま

ひて、騰り坐しき。是に、大氷雨を零して、倭建命を打ち或はしき（此の白き猪と化れ
るは、其の神の使者に非ずして、其の神の正身に当たれり。言挙せしに因りて惑はさえし
ぞ）。故、還り下り坐して、玉倉部の清泉に到りて息ひ坐しし時に、御心、稍く寤めき。故、
其の清泉を号けて、居寤清泉と謂ふ。

其処より発ちて、当芸野の上に到りし時に、詔ひしく、「吾が心、恒に虚より翔り行か
むと念ふ。然れども、今吾が足歩むこと得ずして、たぎたぎしく成りぬ」とのりたまひき。

故、其地を号けて当芸と謂ふ。其地より差少し幸行すに、甚だ疲れたるに因りて、御杖を衝
きて、稍く歩みき。故、其地を号けて杖衝坂と謂ふ。尾津前の一つ松の許に到り坐すに、先
に御食せし時に、其地に忘れたる御刀、失せずして猶有り。爾くして、御歌に曰はく、

尾張に 直に向へる 尾津崎なる 一つ松 吾兄を 一つ松 人にありせば 大刀佩
けましを 衣着せましを 一つ松 吾兄を

其地より幸して、三重村に到りし時に、亦、詔ひしく、「吾が足は、三重に勾れるが如く
して、甚だ疲れたり」とのりたまひき。故、其地を号けて三重と謂ふ。其より幸行して、能煩
野に到りし時に、国を思ひて、歌ひて曰はく、

倭は 国の真秀ろば たたなづく 青垣 山籠れる 倭し麗し

又、歌ひて曰はく、

命いのちの 全またけむ人は 畳たたみ薦こも 平へ群ぐりの山の 熊くま白かし檜しが葉を 髻うづ華はに挿させ その子

此この歌は、思くにし国の歌ひうたぞ。

又、歌ひて曰はく、

愛はしけやし 我わ家ぎへの方かたよ 雲くも居も立たち来くも

此これは、片かた歌うたぞ。

此の時に、御みやまひ病ひ、甚いと急にはかなり。爾しかくして、御みうた歌たに曰はく、

嬢をとめ子の 床とこの辺べに 我わが置きし 劍つるぎの大刀たち その大刀はや

歌をひ竟はりて、即すなはち崩はりましき。爾しかくして、馭はゆまの使つかひを貢たて上まつりき。

小学館刊『新編 日本古典文学全集（底本は真福寺本）』による